

# 卒業生訪問

## ♥ 貴重な出会いを糧に幅を広げる染織家 ♥

家政学部1回生 小林敬子さん



1965年頃東京銀座で目に留めた六枚吉野織の帯、これが小林敬子さんを織りの道へ導いたきっかけでした。幼い頃から陶芸や漆の職人を逗留させた数寄三昧の祖父の暮らしぶりや、着物好きの祖母を間近に見て育った小林さんだからこそ目に留まった渋い帯だったそうです。瞬時に「このようなものを自分でも！」という気持ちに駆り立てられ、草木染めによる機織りの世界へ飛び込み以後30余年、多くの受賞を重ねられ高い評価を得てこられました。金城学院大学新校舎にも作品が展示されています。

龍村織物の染め職人吉田富太郎氏から絹糸の練りと草木染を学び、型絵染作家であり琉球紅型研究者であった人間国宝・鎌倉芳太郎氏からは図案の基礎と製作姿勢を示され、又結城紬糸の研究者水島繁三郎氏には絵緋の種糸の作成を徹底的に仕込まれるなど、貴重な出会いを自らの糧にして作風の幅を広げてこられました。

糸の工夫をして糸使いをいろいろ変えることで、現代的な感覚も織り上げる事に成功。「透明で美しい色が染まり、織り上げると艶やかで鮮やかなものになりました。」とご苦労の後の新しい喜びを語られます。「日々の気配」や「移ろい」といった微妙な感覚を五感で受け止め、その空気感を草木に求めて糸に染め、織り上げる小林さん作品の多くは、絶妙な色の取り合わせ、柄の展開、デザイン性、そしてそれらをいかに表現するかを駆使される巧みな練りの技術など、一枚の着物に寄せる思いと感性に皆は目を見張られるまさに芸術です。近くは“美しいキモノ”秋号、“婦人画報”11月号に作品が紹介されるとの事です。

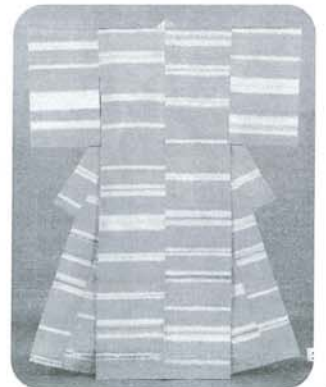
岡崎市に在住しご活躍ですが、「三河湾を望む自然に恵まれた土地で、季節の移り変わりや折々の光や風を全身に感じながら製作するのは幸せです。」とおっしゃり、繊細で美しい色を納得するまで求める意欲と挑戦はまだまだ尽きません。

本年11月1日から9日迄（3日、6日休館）、東京銀座和光ホールにて“小林敬子染織展”が開かれます。

### ■プロフィール

小林敬子（こばやし けいこ）

- 1943年 愛知県岡崎市に生まれる
- 1973年 龍村織物 吉田富太郎に染めと練りを師事
- 1979年 伝統工芸東海支部展 日本工芸会賞受賞
- 1980年～1983年 「型絵染」重要無形文化財保持者（人間国宝）鎌倉芳太郎に師事
- 1982年 日本伝統工芸展初入選
- 1983年 伝統工芸東海支部展 愛知県教育委員会賞受賞
- 1985・88・95・97年 個展
- 1986年 日本工芸会正会員となる
- 1999年 愛知21世紀芸術家集団展出品（パリ）
- 現在 日本工芸会正会員・岡崎美術協会常任理事  
作品集出版 絵緋・細織



## クラス会便り

第8回生クラス会2005年1月30日（日）  
名古屋駅前ターミナルホテル頤和園にて

卒業して30年ぶりに出会うクラスメイトあり（11年ぶりに開催）出席者21名、なごやかな会となりました。担任だった水島裕先生の水と金城の金をとり、金水会という名称しております。

田中美鈴



第5回生クラス会2004年10月30日（土）  
名鉄グランドホテルにて

「野のはな」総会の後、席を移し行いました。県外からも多数参加で、同ホテルにそのまま宿泊という方もあり、時の経つのも忘れ、思い出のキャンパスライフにひたり、夜遅くまで語り明かしました。

鬼頭桃子

